

『三四郎』迷える羊

Junko Higasa

美禰子は三四郎に恋をしていただろうか？いや、美禰子が結婚したかった相手は野々宮宗八である。しかし彼女は池のほとりで、自分に注がれる三四郎の視線に気付いた。そして「無意識の意識（計略ではない自然から発する意識）」の行動に出た。

『左の手に白い小さな花を持って、それを嗅ぎながら来る。嗅ぎながら、鼻の下に宛てがった花を見ながら、歩くので、眼は伏せている。それで三四郎から一間ばかりの所へ来てひょいと留った』彼女は看護婦に問う。『これは何でしょう』『これは椎』『「そう、実は生っていないの」と云いながら、仰向いた顔を元へ戻す、その拍子に三四郎を一目見た。三四郎は慥に女の黒眼の動く刹那を意識した』

まず椎の実<sup>たしか</sup>は縄文時代には食糧であった。社会的地位の低いこの時代の女は、結婚しなければ生活が成り立たない。その食料を得られない今の彼女は、神の白い薔薇を持つ未婚の白い花である。そしてわざわざ三四郎の傍まで来て発した質問は、明らかに三四郎に聞かせるためである。「黒眼の動き」は漱石作品によく登場するが、女が無意識に男を誘惑する時に起る現象である。そして美禰子の罪はこの刹那に発生した。

美禰子は、研究生活と結婚を現実的に判断して自分を迎えてくれない野々宮に対する恋の苦しい感情を、自分に好意を寄せる三四郎へ放散する。美禰子のその意識は、広田先生の引越し手伝いの際に、こんな形で現れる。

『何を見ているんです』『中<sup>あ</sup>てて御覧なさい』『私<sup>きつき</sup>先刻からあの白い雲を見ておりますの』『駝鳥の襟巻に似ているでしょう』

ここで襟巻にボーアというルビが振ってあるのは偶然の一致だろうか。毛皮の襟巻をボーア(boa)というが、ボーア(Bohr)原子論というものがある。それは「核の周りを回る特定円形軌道上の電子は電磁波を放射しない。遷移が許容された別の軌道との間を電子が遷移するときに電磁波の放射・吸収が起る」というものである。これをこの状況に当てはめると、野々宮さんという定常軌道上を廻る美禰子は誘惑を放たない。けれど恋の移行可能な相手が現れた時、美禰子は誘惑を放射する。それが現象である。

それから菊人形鑑賞の際、気分が悪くなって抜け出した美禰子と、それを追った三四郎の会話。『「迷子」女は三四郎を見たままでこの一言を繰返した』『迷える子一解って？』ここで漱石は「美禰子」という固有名詞を使わず「女」と表す。即ち美禰子は、結婚以外に生きられる道はないという女の現状を三四郎に訴え理解を求める。

そして結婚決定を表す決済の場面。『結婚なさるそうですね』『女はややしばらく三四郎を眺めた後、聞<sup>きまかね</sup>兼程の嘆息をかすかに漏らした。やがて細い手を濃い眉の上に加えて云った。「われは我が<sup>とが</sup>愆を知る。我が罪は常に我が前にあり』『愆<sup>とが</sup>』という文字は「あやまる」とも読む。美禰子は三四郎と初めて出会ったときの所作で三四郎に謝り、その罪を画に封じ込めるつもりでポーズを選び、別の男と結婚する。

『森の女』という画題は、神の「迷える羊」でありながら社会の「迷える子」である女の「彷徨する運命」と「男にとって女は謎である」という意味を併せ持つ。『森の女と云う題が悪い』女もまた人間の罪を背負う「迷<sup>ストレイ</sup>羊<sup>シープ</sup>」に相違ない。(2014.4.20)